2024年6月３0日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神の弱さを身に受けて

［コリントの信徒への手紙二12章2～10節］

「わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。彼は楽園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」

[1] パウロの本心の言葉

 今日は、「コリントの信徒への手紙二」をこの礼拝の中でご一緒に開いて味わう最後になります。来週からは、「創世記」の中のヤコブの生涯を見て参ります。

　コリント書（ⅠⅡ）の著者、使徒パウロという人は、誰もが認める大伝道者と言えると思います。しかし、彼は自分では自分の事を、凄く立派な人物だとも、強い人物だとも思っていなかったと思います。彼は今日の箇所で 「むしろ喜んで自分の弱さを誇りましょう」（9節後半）という言い方をしています。「弱さを誇る」。彼はこれを何かポーズで言っている訳ではなく、本心からそう言っていると思います。この言葉の前には有名な言葉が出てきますね。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」（9節前半）。この聖書の言葉がとても好きだという方もいらっしゃると思います。その方は、間違いなくクリスチャンですね。クリスチャンでなくても色々な聖句を自分の愛唱聖句として挙げることはありますけれども、クリスチャンでない方がこの聖句を愛唱聖句にすることは、まずないのではないでしょうか。それは、この御言葉が好きだというのは、神様・キリストによる逆転を知っている人、体験をしているから言えるからだと思うのです。これは本当に素晴らしい主イエスの言葉だと思います。

[2] 「わたしは弱い時にこそ強い」

　パウロはこの12章の前の11章で、これ迄の自らの伝道者の歩みの中で、どれだけ大変な目に遭ってきたかということを包み隠さずに語っています。このことは意外に思われるかもしれませんが、パウロは、当時のクリスチャン、特にそのリーダーたちから必ずしも良く思われてはいなかったようです。あいつは偽のリーダーだ、と叩く人も多かった。パウロはいわゆる12弟子ではないし、何しろかつては熱烈なユダヤ教徒としてクリスチャンたちを捕えて迫害をしてきた人物なのですから、信用がならん、と言う人たちも少なくありませんでした。でも、どうですか？彼は本当にキリストに捕えられて生きた人でした。そのように変えられた人です。それは聖霊のお働きです。当時、多くのリーダーと言われる人たちが自分たちの働きを誇っていましたが、それに対するパウロの言葉、11章21節以下を少しだけお読みします。―「だれかが何かのことであえて誇ろうとするなら、愚か者になったつもりで言いますが、わたしもあえて誇ろう。彼らはヘブライ人なのか。わたしもそうです。イスラエル人なのか。わたしもそうです。アブラハムの子孫なのか。わたしもそうです。キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。」―その後も続きますが、ここでパウロは何を語っているのでしょうか？苦労の自慢話ではありません。私がこのような歩みをするに至ったのは、ひとえに神様の故なのだと言っているのです。神様があって、今の私がある。神様がいなければ、キリストがいなければ、今の私はないという彼の信仰告白なのです。その信仰告白の中で、彼がどうしても話したかったことがあった。それが12章です。

　初めの書き出しは、パウロは自分のこととして語っていません。「私はひとりの人を知っていますが、その人は、神がおられる天上・楽園の幻を見せてもらった人です。私はその人のことを誇ります」というようなことを言っています。恐らくはこれ、自分の体験なのですが、それは第三者的に隠して語り、自分自身のことについてはこう言います。12章5節。「しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません」。今日のキーワード、「弱さ」です。

　パウロは何故ここで「弱さ」ということを語ったのでしょうか？この後を見てみますと、彼は自分の病のことに言及していますね。「わたしの身にひとつのとげが与えられました」（12:8）と。具体的には何のことかは良く分かりません。目の病気を持っていたという人も多いですが、彼が癲癇持ちであって、時々その発作が起こり、それが眼にも影響していたのでは？と言う人もいますが、よくは分かりません。しかし「肉体のとげ」というのは嫌ですよね。とげですから、痛いです。こんな時にという時に刺してくる。避けられない。でもパウロは、それを「思いあがらないように、わたしを痛めつけるサタンから送られた使いです」と平然と言い切っています。私はこの平然さが不思議と言うか凄いなと思いました。とげを受容しているのです。勿論、とげは無い方が良いし、それを真剣に神様にも祈ったと書いてあります。「三度も」というのは、3は完全数、何度も何度もということでしょう。しかし、神様からの答えは、とげを綺麗さっぱり取り除くということではなくて、お言葉でした。―「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」。この主からの言葉をパウロは貰いました。この後にパウロが語ったことは、私は奇跡だと思います。第三の天にまで引き上げられ、天の幻に与る以上の奇跡だと私は思います。彼はこう言いました。12章9、10節。―「キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」。―「わたしは弱いときにこそ強いからです」という言葉は、完全に矛盾している言葉です。クリスチャンは、この矛盾を持ち、葛藤しながら生きる人です。ふんぞり返って生きるのでない、また、鎧を被って生きるのでも、病気をしないで生きるのでもないです。或はお金の力だけに頼って生きるのでもありません。ある意味、裸で生きるのです。その裸のあなたを、私たちを、しっかりと捕らえるために主イエス様は来て下さったのです。「わたしの恵みはあなたに十分だ」と言われたのは、他ならぬ主イエス・キリストです。主は私たちのために本当に貧しく、弱い者となられました。イエス様がずっと天上におられ、ただ腕組みをして私たちが苦しむのを傍観しているとしたら、私たちは絶望です。しかし、そうではありません。主は本当に自ら弱いお姿を取り、十字架にかかり、私たちの人生を背負って下さいました。そして 「わが恵み、汝に足れり」と、私たちを抱きとめて下さっているのです！ですから私たちはハッキリ言えると思います。「キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。…わたしは弱いときにこそ強い」と。

[3] 「弱さ」にしがみつかくてよい

　その時の「弱さ」というのは、私は、自分が本当に神様の前に無力なのだという意味もあるのではないかと思いました。「弱さ」というのはくせ者で、私たちはともすると「弱さ」というものにしがみついてしまうこともあるようにも思うのです。弱さの中で「自分はこうなんだ」と開き直ってしまうと言いますか…。しかし、本当に私たちのために弱さを身に受けて来て下さったキリストの招きというものは、そんな私たちの頑なさ、傲慢さをこっぱみじんにしてしまうものだと思うのです。

　ドストエフスキーの『罪と罰』の中に、こんな素晴らしい描写があって、私はそれを思い出しました。それをご紹介してお祈りをしたいと思います。

　マルメラードフという、娘ソーニャが身を売って得た金で酒を買うような、どうしようもない老いた父親（以前は官吏でもあった）がいるのですが、お酒に酔いながら、驚くような神への信頼の言葉を語る場面があります。そして、これは作家ドストエフスキーの信仰告白でもあると思います。

―「万人をあわれみ、万人万物を解する神さまが、われわれをあわれんで下さる。そして最後の裁きの日にやって来て、こう尋ねて下さるだろう。『意地の悪い肺病病みの継母のために、他人の小さい子供らのために、われとわが身を売った娘はどこだ？地上に住んでおった時、酔っぱらいでやくざものの父親をも、その乱行をも恐れずに、気の毒がった娘はどこだ？』こうして娘のソーニャは赦されるのだ…神さまは万人を裁いて、万人を赦される…そして皆を一順すると、我々をも召し出されて、『そちたちも出てこい！』と仰せられる。『酒のみも出てこい、意気地なしも出てこい、恥知らずも出てこい！』 そこで、我々が臆面もなく出て行って御前に立つと、神さまは仰せられる。『なんじ豚ども！そちたちは獣の相をその面に印しておるが、そちたちも来るがよい！』 すると知者や賢者が言う。『神さま、なにゆえ彼らをお迎えになりますか？』 すると、こういう仰せじゃ。『知恵ある者よ。わしは彼らを迎えるぞ。それは彼らの中の一人として、自らそれに値すると思う者がないからだ…』。こう言って、我々の手に口づけして…我々は泣きだす。そのときこそ、我々はすべてを悟るのだ。…主よ、なんじの王国の来たらんことを！」』。

この最後の神様の言葉、「わしは彼らを迎えるぞ。それは彼らの中の一人として、自らそれに値すると思う者がないからだ」というのは、本当にそうだと思います。

主イエス様は仰いました。「わたしの恵みはあなたに十分である！」。―ですから、私たちもこう告白しながら生きて行けるのです。「キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」と。お祈り致しましょう。

主イエス・キリストの父なる神様、今月もこの時まで守り、お支え下さり感謝致します。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」という御言葉もありますが、私たちはなかなか全く自分自身を明け渡せない存在だと思うことがあります。あなたの前に格好をつけてしまうのです。しかしあなたは弱くなられ、全てをお捨てになって、十字架を背負って下さいました。私たちを引き戻すため、御腕にしっかり抱きとめて下さるためです。どうか、そのあなたの愛を、常に新しく教えて下さい。そして、‟自分を愛するように隣り人を愛してゆく“生活に導いて下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。